IATSS三十周年によせて

随想

森田　孝　大阪大学名誉教授

大阪大学名誉教授、郡山女子大学客員教授、
国際交通安全学会評議員。

哲学発祥の地である古代ギリシアの哲学者たちで、人間と交通といったテーマについて正面から論じた人はいないように思われる。しかし、現代の哲学において、近年ますます重要な意義を持つものとして注目されてきた解釈学（Hermeneutik）の生まれ故郷は、すでに古代ギリシアにあって、このヘルメーノイティクという語は、もともとはギリシア神話に登場するヘルメース（Hermes）に由来している。ヘルメースはデウスの末子としてアトラスの娘マイアから生まれたが、デウスの長男のアポロンに劣らず誕生の時から、やんちゃで多様な力をもっていたという。このヘルメースが、ある意味で交通と深い関わりがあると思われる。

ヘルメースは、誕生するやカメを捕えて甲羅の中身を引き出し、これから琴を発明したとか、長兄アポロンから一群の牛を巧みに盗み出して、アポロンと取引きしたなどと言われているが、長じて以後、こちらのものをあちらに、またあちらのものをこちらにと仲介する仲立ちの神となり、自由通行権の認可と保護一般の機能と幸運や利益をもたらす機能を併せ持つ境界の神として力を発揮したという。そのために彼は、つば広の帽子をかぶり、軽やかなサンダルを履き、使者の杖、もしくは魔法の杖を持っていた。やがてこの杖には翼が付き、後には冥界の動物であり、また知恵のシンボルである蛇が巻きつくようになった。死者の魂を冥界ハデスにまで送り届ける口達者で、優雅な神々の使者としてギリシア神話に描かれ、ギリシア彫刻でも、たいていは凛々しい若者として表現されている。

すでにプラトンやアリストテレスの著作の中で、「ヘルメースのようにする」という語（ヘルメーネウエイン：hermeneuein）が神々の言葉を人間に、また人間の思いを神々に伝える技に関わって用いられ、やがて一般に言葉がヘルメーネイア（意味を伝え、解釈する取り次ぎ）であると考えられ、アリストテレスの『オルガノン（論理学）』ではその一学科として「ペリ・ヘルメーネイアス」（ラテン語訳ではデ・インテルプレタチオーネ）が語られるようになった。こうした流れが現代において、さらに広範にわたる精神的な意味の世界を理解し、表現し、体験する際の方法論としての一般的解釈学として新たに展開されるようになったのであるが、思いを交通に戻すと、もともとの語源になったヘルメースが、一方ではやがて物資や商品の仲立ちとしての商業の神として、古代ローマ時代にはラテン語で「メルクーリス」となり、やがて英語の「マーキュリー」となったが、哲学の問題としては人間の精神世界の交流の方法論となり、展開されていった。今日、商業的交流や思想的交流との関わりの中で交通の問題をもう一度考え直すことが必要であると思われ、かつてヘルメースが担っていた働きを再考する必要があろう。